

おられます。そこら中に笑う材料はあるかもしません。けれども材料はあっても、もし我が心が笑うことができるまでになつておりませんと笑えません。私、この間ちよつと寝ておりましたが、何も食べられません。日ごろ好きな物の味を考へて、食べてみようと思ひまして注文致しました。みなが作ってくれます。けれども昔書んで頑いを味と、味が變わりました。食べられません。我が心に喜びのない人が何を見ても、世の中に笑うほどのものはありません。

~~笑うと言いますと大黒様は笑つております。日本国には昔から大黒様を祀る家が多いのであります。これは土で簡単に作つたものを乞食の人がこつそりと軒ごとに家ごとに配ります。そうすると大黒様がどの家にも入つて来まして、腹を立てるわけにもいきませんからその大黒様をお祀りしておりますと、その後、この大黒様を配つた乞食の人達がこれをもらひに来ます。それで「大黒様はいらない」と言つて返すのも變でありますし、大黒様は自分の所に置いて、代わりに乞食に物をあげておりました。どの家でも大黒様が好きといふわけでもなくして、大黒様などいらないといふ家もありますけれども、そういう家に入れられても大黒様は人形ですから、やっぱり相變わらず笑つております。笑つておればどうもその家の人も腹を立てるわけにもいかない。自然それを祀ることになります。大黒様がいっぱいになりました。田舎ではそういう行事もありました。~~

~~そこで考え方をひとつ変えまして、何か面白いことがあるから笑顔をするのではなく、笑顔をして物事を見る、破顔微笑をこちらのものにします。すると何事があつても笑ふはずであります。動物の中で笑うものは何でしょうか。犬のあまり笑つたのを見ません。猫のあまり笑いません。雀も笑つたのを聞�ません。田舎に行きますと牛やら馬がおりますが、馬が少し笑うようあります。猿も少し笑うかもしません。けれどもあまり笑つている猿を見たことはありません。そうすると動物の中でともかくも笑顔のできるものは人間です。そうではないでしょうか。~~

~~その笑顔は破顔微笑。仏様から直ちに印可された正法眼藏であります。仏法の眼、それは人に笑顔をすること。ここに集まりますランカーの労務者たちも笑顔をします。言葉は全くわかりませんけれども、笑顔をされるこちらも嬉しくなります。別に物をもらつたから笑顔をするのでない。顔を合わせたら笑顔をします。それで平和であります。~~

~~笑顔をすることしかできないようなら、これはちよつと人間から格が下がつたお坊様であり庵主様、青年たちであります。コンクリートを練つておつたり土を運んでおるのに笑顔じこでないと考へるかもしねないけれども、コンクリートを練るのも笑顔、土運びも笑顔であります。笑顔の人が土を運びますと、みんなお淨士になります。腹を立てて運びますと怪我をします。笑顔を作れないといふのは、人間からちよつと格の下がつたお人になりかけておるようであります。笑顔をすることを学びなさい。笑顔を作りますと、これは動物以上の世界であります。~~

~~摩訶迦葉がお釈迦様から最後に単伝相承したといふ破顔微笑の法門。相好を崩して笑う。おかしいことがあつたのではありません。心の喜びを示しただけであります。心に喜びのない人間には必ず笑顔ができないと共に、すべての動作がありがたく表示されません。そして人を侮る、こういう姿に変わってしまいます。お正月は笑顔を習い始めねばならない時であります。笑顔をするための遊戯でも仕事でもせねばいけません。花壇作りなどもやっぱりなかなかよい考えのようにも思えます。~~

~~笑顔をすることですね。笑顔のできない人は、もう一段人間から格を下がつて出直してください。~~

昭和五三年一月九日 スリランカ・仏足山

人間誕生の意義

「天上天下唯我獨尊」とは

最近、お釈迦様のお誕生(四月八日)を記念するお祭りを致しました。お花御堂をこしらえまして、お花で飾つて、甘茶をお釈迦様の誕生像にかけて、お釈迦様のお誕生を祝いました。

伝えるところによりますと、お釈迦様はお誕生なさると同時に東に七足、そして西に南に北に七足ずつ歩かれま

した。そして右の手を上げて天を指し、左の手を下げて地を指し、天上天下唯我独尊と申されました。唯我独尊しこう。勝る者はない。天上天下唯我独尊。三界はみな苦しみなり、我皆度脱する、救い上げるといふ。この偈の經文を唱えられたと申します。お釈迦様は本当に天上天下唯我独尊し。これに間違いがなきそらであります。宗教といふものは尊いものを探すことあります。尊いもの、一番尊いもの、それをある宗教では神様といふらる名で呼んでみたり、それからアメリカ・インディアンは「大いなる魂」、そんなふうに呼んでおります。キリスト教では天上の神が遣わした子供、キリストといいますが、これが尊いもので、仏教ではそうではなく天上の神がそのまま人の形をとつて生まれた、これがお釈迦様。どれも宗教の考え方であります。

お釈迦様は尊い者は自分であるということをおっしゃる。それは何が尊いのか、どうして尊いのか。三界と申しまして、天上界に住むもの、地上に住むもの、それから地の下、水の中に住むもの、あらまし住む世界を三つに分けます。三界はどこへ行つてもみな苦しみ。三界皆苦であります。みな苦しみ、我皆度脱す。これを助ける。それだから尊いのです。三界の苦しみをみな助けることを、お釈迦様は誕生のその日に宣言されたと申します。これはあり得べきことか、なかつたことか、知りません。不思議なことであります。そう伝えております。

ここで誕生といふものを考えてみると、人間は誰でも誕生した者であります。人間はとにかくみな生まれてきました。その初めは赤ん坊であります。その誕生の意義が尊いものでなくてはならない。どうでもいいものであつたり、悪いことをするために誕生したのではいけません。誕生の意味が尊いものであるといふことは、誕生した自分が世の中の苦しみをみな救うから、それが尊いといふことになります。

宗教といふものはこの苦しみを救う仕事であります。苦難行とも申します。この苦しみの世の中のすべてを我一人で救つてしまふ。一番尊いことであります。たゞえ権力をもつて天子になつて尊いといいましても、それは一つの反逆が起これば尊くなくなります。いまある国ではクリーティーといふものを起こして大統領を死刑にする。そんなことをしております。権力や何かで尊い道を示そうとしても、それは長く続きません。

日本の戦国時代の織田信長（一五八二年没）も光秀のクーデターによつて殺されました。たゞえ殺されなくとも、権力によつて、力によつて勝ち得たものは、やがて滅びます。救いといふ本当に人のためになることをする。それが一番滅びない力のようであります。宗教といふものはそういうことを人に教えていきます。

人が生まれてくる、それはよいことをするために生まれてくる。何が一番よいことか。大勢の苦しみを救うことが一番よいこと。そして、そういう使命を帯びて生まれてきたのがお釈迦様だと申します。それなら我々はどんな使命を帯びて生まれてきたかといふと、自分はよい使命、尊い使命を帯びて生まれてきたと答える者はないでしょう。悪いことをして、よいことをしないから、尊い使命を帯びて生まれてきたなどと嘘事を自分で言うわけにいかない。自分を偽ることをせずに、自分のしていることがよいことが尊いことか、それを点検すると、自分の誕生、生まれてきた意味が何なのか、事実がその人に語るでしょう。

自分のしたこと、自分のすることで、何が一番尊いか、それはみんなを救うことありますが、これは大きい力で重い物を持ち上げるといふようなことではありません。みんなの苦しみの根本、それを考えます。その苦しみの根本を苦しまないように除けばよい。それが宗教の教えであります。宗教の不思議な力。お釈迦様のご一代は、托鉢してご飯をもらつて食べて、ご臨終のときも木陰で静かにご臨終なさいました。人間としての生涯はしごく簡単であります。それにもかかわらず今日に至るまで一千五百年。その教えによつていつの時代でも大勢の者が救われていきます。苦しみを解きほどいてもらいます。宗教の力といふものはこういうところにあります。いまの個人個人の筋肉の力、学問の力、そんなものとは違います。

我々が自分で人を救うといつてもどうにもなりません。現在この仏様が衆生を救われた歴史、時間、空間といふものを考えてみると、仏様のお力を否定することはできません。事実救われました。事実みんなが喜びました。その仏様のご用を勤める、後を受け継いで教えをみんなに伝えていく。これが我々のできる範囲の一番よいことであります。

お祖師様は『寂日房御書』の中でお誕生の意味を自ら説かれましたが、法華経のお題目に逢つた時、結局お題目の

行者になつて毎日お題目を唱える。ということは、誠に過去十万億の仏を供養せる者にして初めてお題目を修することができるということあります。自分たちは過去のその前の世のことを知りません。それがお経に説明してあります。法華經に十万億の仏を供養せる者は、悪世に生まれてこの法華經をもつて修行するとあります。

これをお祖師様は自ら誠に過去十万億の仏を供養するといよい仕事をしたものだから仏に会つて、お題目を持つことができた。自ら喜ばれます。過去の世のことは自分ではわかりませんが、教えにそろ説いてある。私たちもお題目の尊いことを一たび信じていけば過去も尊いものに変わるでしょう。お祖師様が誠に過去十万億の仏を供養した功德だと言つて喜ばれます。私たちもそれができねばならない。あなたの方はお題目を現在唱えておりますけれども、その尊い価値を見いだすことができない。したがつて、いくら唱えていてもありがたいとも何とも考えません。お題目があつたといふと考へないと共に、自分もありがたいことをしたいと考へないから、自分の一生の、誕生の意味がわからぬ。それが誕生の意味であります。

お題目のほかにどんなよいこと、尊いことがあり得るか。それはお題目のありがたいことのわからない人には、やはりわかりません。ありがたいことなんて世の中にあるのかと思ひます。第一、親がありがたくない。学校の先生がありがたくない。政治家も隣りの人もありがたくない。夫婦も喧嘩してありがたくない。子供もありがたくない。ありがたくないものばかりでしょう。我が人生はこのありがたくない仕事をして終了と思えはつまらんでしょう。我が人生を尊いものにするためには尊い仕事を見つけねばならない。そうして尊い生活を送るように我が身をせねばならない。それが誕生の意味であります。

尊いことというものはどこにあるのか、我が心中よりほかにありません。日蓮大聖人が自分で尊いとおつしやつても、それはご自分お一人の話。その時代の他的人は誰もそんなこと認めません。日蓮大聖人は重罪犯、死刑の判決を下された罪人、時の政治家から見ればそんなもの、一般庶民もそのくらいの見当で見ておられます。そう申しまられて憎まれたその人が、自ら一人過去十万億の仏を供養して、何のためにこの世に生まれたか。斯人行世間、能滅衆

生きとあります。仏様の勅命を受けてこの世界に生まれ出て、みんなが苦しむその種、無明、迷い、煩惱に満ちて真っ暗になっている世界の闇を照らす。自分の仕事をうそぶくらわれた時に日蓮大聖人は尊くなる。誰も一人も敬わず、みんなが侮つても、自分が尊い使命を感じて尊い仕事をしている。その時に人生が輝くものになります。

尊いものを向こうに見いだし得ないと、あなた方は言うでしょうけれども、向こうにはないのです。我が心中にあります。我が心中に尊いものを見いだすことのできない者がどこを探しても、尊いものなど見つかりません。それが現代の病であります。親も尊くない、子供も尊くない。友達も誰も誰も彼も尊くない。それは我が心中に尊いものがないからです。この人生の意義がいまはみんなわからなくなりました。

人もし仏教を破れば、家に孝行の子供がなくなると説かれてあります。親不幸の子供は親を尊いと思いません。現代の科学知識は、余計なことを教えて、親を尊いものとは教えません。親が尊くないものが隣りの人が尊いはずがない。尊くないものだから無宗教。宗教とは尊いものを見いだす教えであります。無宗教ではその尊いものは見いだし得ない。

ランカーという所は小さい九州ほどの島でありますけれども、仏教国であります。国は貧しく、高い教育を受ける者もあまりないようです。けれども仏教が栄えておりするために、みな人に会えば供養礼拝をすることができます。日本からやつてきた巡拝団の人たちは、ランカーの人々に接して初めて驚くほど敬意を表されたことを感じまして、それがこちらの喜びとなつたようあります。人に侮られれば、馬鹿にされれば、せつから外国に行つても面白くありません。知らない人ばかりですけれども、それが丁重に子供まで礼拝します。合掌し礼拝まれて、こちらは向こうの子供を馬鹿にするわけにはいきません。すると親しみが生まれてきます。

現代の病は、この尊るべきものを心中に見いだしていないところにあります。色盲といふのは目は見えますけれども、向こうに赤いものがあつても青いものがあつてもその色がわかりません。向こうに美しい何色があつてもわかりません。それはその目が色を見分けることができないからです。こちらの目が悪い。我が心中に礼拝する

者は人を礼拝します。それは我が心の中に尊いものを見いたした人であります。

不輕菩薩といふ菩薩が法華經の中に出てきます。法華經は修行の菩薩であります。見るごとにみな礼拝して、お均様ですけれどもお経は何も読みません。何よりも人を礼拝します。仏法のすたれて、みんなの気分が荒びしていく時に、これを治そうとすれば、学問して講釈したて間に合いません。悪知恵は向こうの方が賢い。ただ礼拝をします。礼拝の意味を語ります。

私はあなたを深く敬います、決して侮りません。なぜかと言えば、あなたはやがて仏様になる人——そう言って礼拝します。そう言われば、仏様になる種が、そして人に礼拝されるに値するものが我が身にあるのか、千人に一人はそう考えるでしょう。これよりほかに救う道がありません。向こうが礼拝しないから、こちらも礼拝なんかしないと言つてしまつては、あんまりいいことはできません。ただ喧嘩でもするだけであります。我が人生を尊く迷ろうとすれば、我が心の中に尊いものを見いださねばならない。我が心に尊いものを見いたせる目が開けば、誰を見てみんな尊く見えます。みんな礼拝の対象になる。その時世界が平和になります。

人の誕生、人が生まれました。その時から、天上天下唯我独り尊い、三界はみな苦しみ我皆度脱す、私がみな救つてあげる、みんなの苦しみを救うと、そういうことを朝から晩に教えられて、それはかり考えていけば、尊い目が開きます。尊いとは人の苦しみを救うこと。人の尊いことを知り、人を救つてあげる。それは我が心の中に尊いものを見いだす目が開いた時に、できることであります。

昭和五三年五月六日 热海道場

井30-4

後を潤さない人生を

——「七夕様」の教え——

きょうは七夕様のお祭りであります。

七夕様の伝説は中国の方から伝わったといいます。七月といえば旧暦では秋の初めであります。空が澄み渡つたところに天の川が見えます。その天の川を隔てて光る星が二つあります。一つは牽牛星と申します。牛を引いている男の星、百姓であります。それからもう一つは織女星と申します。機織りをする女の星であります。多分、着物を作つたのであります。これは古い昔の人間の家庭を作つていく上の仕事の姿であります。その二つの星は川を隔てて一年中、一方は田んぼを耕し、一方は機織りをして会うことができません。けれどもこの七夕様の一夜だけは、もし雨が降らなかつたならば川を渡つて会うことができるといふのであります。これは若い夫婦の生活についての教えであります。

どうも人は毎日会つておりますと喧嘩をします。夫婦でも夫婦喧嘩ということがあります。それでは面白くありません。一年にただ一夜だけ会えると、そう考えますとその一夜が尊いものになります。その一夜がかけがえのない大切な一夜になります。それで普通家庭においては毎日会つてはおりますけれども、それでもなお一年に一度会うような思いで会えば、互いに無礼なことをしたり喧嘩をしたりする気にはなれないでしよう。

お祖師様が親孝行の法門を説かれますけれども、その中に両親に何かを書んで差し上げられるものがあれば仕合せ、それができなくて一日に二、三度顔を見せたらばよいといふことが説かれてあります。子が笑顔を見ると親も喜ぶ気になりますけれども、子供は気ままを言いたくて腹を立てなかなか笑顔ができません。よそのお客様にな